



米FOMCは2019年の利上げを見送るハト派姿勢を示す

- 米連邦公開市場委員会(FOMC)は政策金利据え置きを決定。FOMCは2019年の利上げを見送るハト派姿勢を示す。
- 国内外景気の不透明感がFOMCのハト派姿勢への転換の背景。FOMC声明文では米国景気の減速の兆しに言及。
- FOMCは2020年に1回の利上げを見込む一方、市場は利下げ転換を織り込む。FOMCと市場の見方には相違が残る。
- 米長期金利低下が足元の米国株の回復を下支え。当面は金融相場の中、米国企業の業績底打ちを探る展開へ。

FOMCは19年の利上げを見送るハト派姿勢示す

米連邦準備制度理事会(FRB)は3月19-20日の連邦公開市場委員会(FOMC)で、大方の市場予想通り、政策金利を2.25-2.50%で据え置き決定をしました。

今回、FOMC参加者の2019年末の政策金利見通し(参加者全体の中央値)は、2018年12月時点の2.875%から2.375%へ大きく下方修正され、市場が先んじて織り込んできた2019年の利上げ休止がFOMC内部のメイン・シナリオとなっていることが示されました(図1)。

FRBがハト派的な金融政策の姿勢に転じた背景には、国内外の景気の不透明感があると考えられます。FOMC声明文では、「労働市場は力強さを維持しているものの、経済活動の伸びが鈍化した」、「最近の米国の経済指標は個人消費や設備投資の減速を示唆している」などと、米国景気の減速の兆しに言及がなされました。

FOMCと市場の間で20年の政策金利予想に相違

2020年の政策金利の見通しに関しては、FOMC参加者の予想中央値では依然として1回の利上げが見込まれています。一方、FF金利先物市場は2020年のFRBの利下げ転換を織り込みつつあり、FOMCと金融市場の間で政策金利見通しの相違が依然として残されています(図1)。

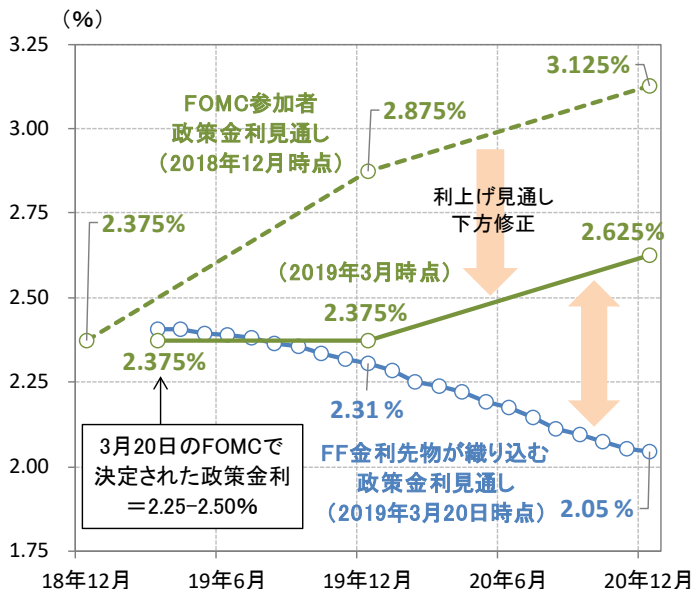
もっとも、2020年の金融政策見通しについてはFOMC参加者の間でも見方が分かれており、当面は米国景気や海外景気の動向への注視が続きそうです。

米長期金利低下が足元の米国株の回復を下支え

FRBが2019年の利上げ休止を示唆する中、足元では米10年国債利回りの低下が年初来からの米国株の回復を支える要因となっています(図2)。

当面の米国株はFRBのハト派的な政策姿勢を背景にした金融相場からの後押しを受けながら、米国企業の業績の転換点(業績底打ち)を探る展開が続きそうです。

図1:FF金利先物とFOMC参加者の政策金利見通し



(出所)米連邦公開市場委員会(FOMC)、ブルームバーグ
(注)FOMC参加者の政策金利見通しは中央値。

図2:米国株、米政策金利、米長期金利の推移



(出所)ブルームバーグ (期間)2017年7月3日~2019年3月21日